

◆本書の構成

このドリルは、文章の〈要約〉力をつけるために編まれた、記述トレーニング用の問題集です。問題文はすべて一〇〇字以内で要約してください。

各問題の冒頭に、難易度の目安・制限時間を表示しました。

難易度レベル ★☆☆…基本

★★☆…標準

★★★…やや難

問題用紙の裏の右側には草稿用紙を付けました。下書きその他、自由に使用してください。裏の左側には問題文の続きが印刷されています。続きを読むにあたっては、問題用紙の右側に必要なだけ折り曲げてください。用紙全体を裏返さずに要約文が書けます。

なお、1～23の上部の囲み数字(①・②…)は段落番号を、24～28の上部の数字は行数を表します。

別冊の〈解答・解説編〉には、問題文を再掲して文章構成等を図解しました。また〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉、〈要約へのアプローチ〉、〈解答例・配点〉を掲げ、読解における着眼点をチェックするとともに、自分でも答案を採点できるようにしてあります。担当の先生に採点していただくのがベストですが、やむを得ず自分で行う場合は、〈要約へのアプローチ〉の中に記した採点基準や、〈解答例・配点〉に掲げた部分点を十分参考にしてください。

さらに、著者のプロフィールや著書も紹介してありますので、ここを手がかりに学習の幅を広げてほしいと思います。

ここに収められた三十題に取り組むことで、文章読解力と記述表現力を養い、生き生きと学習していかれることを願ってやみません。

◆本書の使い方

原則、担当の先生の指示に従って使用してください。

なお、自習としてこの教材を使う場合は、以下の要領で取り組んでください。

① まず、〈問題編〉の冒頭に示した〈制限時間〉内で、全文の〈要約〉に挑戦してください。

——これは、文章の趣旨を〈速くとらえる〉ための練習です。
② 次に、同じ問題について、時間を気にせず、というよりもたっぷり時間をかけて、〈この文章はこういうことを言っていたのか〉と、自分で納得できるまで読み込んでください。

目次

◆ 本書の構成

◆ 本書の使い方

◆ 要約についての考え方

〈随筆・論説〉編

1 話しことばの花束

好本恵 1

2 日韓II合わせ鏡の世界

呉善花 3

3 組織を強くする技術の伝え方

畑村洋太郎 5

4 日本語のコツ

中村明 7

5 ヤバんな科学

池内了 9

6 なつかしい時間

長田弘 11

7 科学者という仕事

酒井邦嘉 13

8 子どもたちはなぜキレるのか

齋藤孝 15

9 こころとことばとコミュニケーション

倉八順子 17

10 植物はすごい

田中修 19

11 日本語表と裏

森本哲郎 21

12 自然保護を問いなおす

鬼頭秀一 23

13 装飾とデザイン

山崎正和 25

14 近代化と世間

阿部謹也 27

15 働く意味取り戻せ！

上田紀行 29

16 日本文化における時間と空間

加藤周一 31

17 『賢くある』ということ

鷲田清一 33

18 人間についての寓話

日高敏隆 35

19 歴史と出会い、社会を見いだす

佐藤健二 37

20 共に生きる

塩原良和 39

21 現代思想のフィールドとしての森林

内山節 41

22 〈子ども〉のための哲学

永井均 43

23 人間の値打ち

鎌田實 45

〈小説〉編

24 獅子吼

浅田次郎 47

25 青べか物語

山本周五郎 49

26 ガールズ・ブルー

あさのあつこ 51

27 おとうと

幸田文 53

28 アカシヤの大連

清岡卓行 55

〈資料の読み取り〉編

29 言葉に関わる知識と能力

57

30 情報通信メディア

59

そして、自分の〈要約〉が十分なものであったかどうか、考え直してみよう。不十分だと感じたなら、推敲してみてください。

——これは、本文の主張を〈きちんと考えて、とらえる〉ための練習です。①と②を繰り返すうちに、二つの力が結びつき、〈速く、きちんと、文章内容がとらえられる〉ようになります。

③ 最後に、〈解答・解説編〉を見て、〈論旨の構造／場面の展開／着眼点〉〈要約へのアプローチ〉を参考に、自分の読解のあり方を確認するとともに、答案を採点・添削（10点満点）してみましょう。

——これは、〈自分の答案を添削する力を養う〉ための練習です。よりよい答案を書く力とは、試験時間内で自分の答案を添削し推敲できる力なので、この練習を繰り返すことが大切です。そのことで、読解力・記述力は確実に深化していきます。

▽ わからない言葉は、そのつど覚えていくようにしましょう。また、しばらく日をおいて、もう一度同じ手順でやり直してみるのが効果的です。前に読んだときと比べて、確実に読解力が深まっていることを実感できるはずですよ。

——各問題の本文は、さまざまなジャンルから成っています。繰り返し読むことで、テーマ・主題についての理解を深めることも、意義のある復習となるでしょう。

◆要約についての考え方

〈要約〉とは、〈文章や話の重要な内容を選びとって、短くまとめること〉を意味します。

そして、〈要約〉には、〈大意の要約〉〈要旨（主旨および趣旨）の要約〉、それと関連する〈題名の提示〉といった種類があります。図示すると下記のような関係になります。

論旨とは〈論述されている内容およびその筋みち〉を意味し、それは〈解答・解説編〉の下段に示してあります。大意はその「論旨」を本文の展開に即して縮小したものです。そして、要旨はその「論旨」「大意」のなかの〈要となる内容〉を指し、本書ではその把握の練習をします。したがって、まずは、

① 筆者が、〈何について〓話題、問題〉〈どう述べているか〓主張、意見〉という核になる部分を読み取ろうと、強く意識して読んでいかなければなりません。

と同時に、筆者は、思いついたことを思いついたままにただ書き連ねているわけではありませんから、

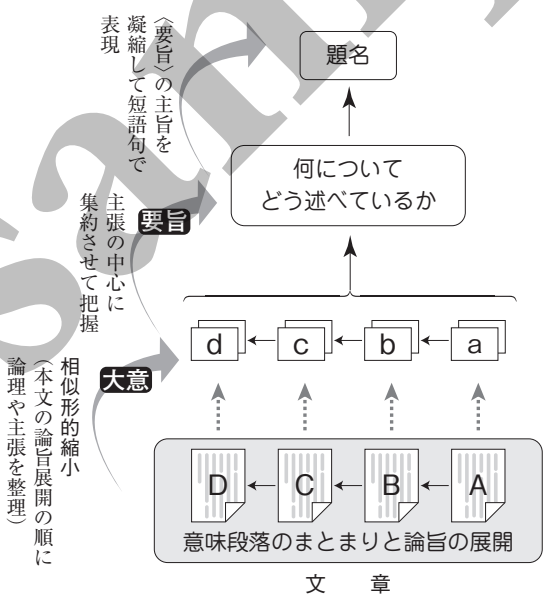
② 筆者が、①について述べるにあたって、〈どのように話の筋つまり論理を展開させていっているのか〉ということにも自覚的になる必要があります。

つまりは、①〈筆者のイタイコト〉と②〈論旨展開の構造〉という、この二点の把握が重要だということです。

入試現代文の問題文のほとんどは、長い文章の中のある特定の〈まとまりのある一部分〉を抜いて作られています。したがってそこには、〈序論・本論・結論〉〈起・承・転・結〉といった構成が見える場合もあり、それも〈要約〉の手がかりになるでしょう。しかし、全ての文章がそうした定まった構成をとるとは限りませんので、先の①と②の把握が最重要となるわけです。

小説の場合は、場面のまとまりを意識しながら、その展開を押さえ、〈ストーリー・あらすじ〉をとらえるとともに、話の山場となる〈心情〉を把握し、〈あらすじ〉＋〈テーマ〉という形で、どんな話なのかが明確になるよう、まとめていきましょう。

資料の読み取りの場合は、まずは①〈顕著な傾向として表れている事柄に注目〉し、②〈細部に表れている事柄にも着目〉していくという順序でデータを整理していきましょう。〈考え〉を要求されているときは、データから客観的に読み取れる範囲で普遍的な意見を添えていきましょう。



ある日、私（「先生」と呼ばれている）は、釣りをしていた「長」や「かんぶり」というあだ名の少年たちに出会い、鮎を売ってもらう。次の文章は、それから三日して、少年たちが、私の家を訪ねてきた場面である。

「鮎とってきただよ。」と長が言った、「買ってくれせえな、先生。」

私はかれらの期待に満ちた注目をあびて、自分に拒絶する勇気のないことを悟り、かれらを勝手口へ廻らせた。そこでもかれらは一列に並び、ひとりひとりが私に向かって自分の鮎に値を付けさせた。そのときになって初めて、寝起きのほんやりした私の頭が、かれらの（注1）かんあく 奸悪な計略を理解した。つまり、まとめて売れば安くなるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない、という狙いなのだ。

「ほれ、みせえま。」とかれらはそれぞれの鮎を私に誇示した、「こんなにえっけえだ、五寸くれえあるだえ、先生。」

そして（注2）しよっから「へゆけばこれ一尾で」（注3）かんは取られる、と言って互いに領き、肯定しあうのであった。私はそこでもまた自分が罠に落ち、縛りあげられたことを知った。私はかれらの誘導にしたがって、値段を付け、それらを買取った。

「いいさ。」と私はかれらの去ったあとで自分に言い聞かせた、「味噌煮にしておけば保つからな、当分おかずには困らないで済むわけだ。」

私はまえの味噌煮を井へ移して、それらの鮎を新しく味噌煮にしかけた。

人は信用しないかもしれない、私自身もこれを書きながら、たぶん人は事実だとは信じないのだろうと思うのであるが、少年たちはその儲け仕事があまりにたやすく、かつ確実であることに昂奮と情熱を感じたらしい。二三日するとまたやって来て、さもうれしそうにはしゃぎながら、窓の戸を叩いた。「並べってばな。」と長の言うのが聞こえた、「おんだらが先だぞ、押すな。」

拒絶されようなどとは（注4）すんちやう寸毫も疑わず、確信そのもののような少年たちの顔を見て、それだけで私は自分の敗北を認めた。——ここまで読まれた方は、もはや小悪魔どもが私を放さないだろう、と想像されるにちがいない。私にしても、仮にふところがあたたかであつたら、容易にかれらの手から逃れがたかつたろうと思う。人は（注5）こうはく黄白の前には、しばしば恥を忍んで屈しなければならぬものだ。少年たちが四度目に襲撃をかけて来たとき、ふところの窮乏という現実に助けられて、私はきっぱりと鮎の買い取りを拒絶した。するとそこに、まったく予想しない事が起こって、私をおどろかせた。私に拒絶されて、少年たちは明らかに失望し、途方にくれた。かれらは顔を見交わし、先生が駆引しているのではないかと疑い、そうでないことを認めるともつと失望し、どうしたものかというふう

に、それぞれの手にした器物の中の鮎を見まもった。

「みんな。」と長が急に言った、「それじゃあこれ先生にくんか。」

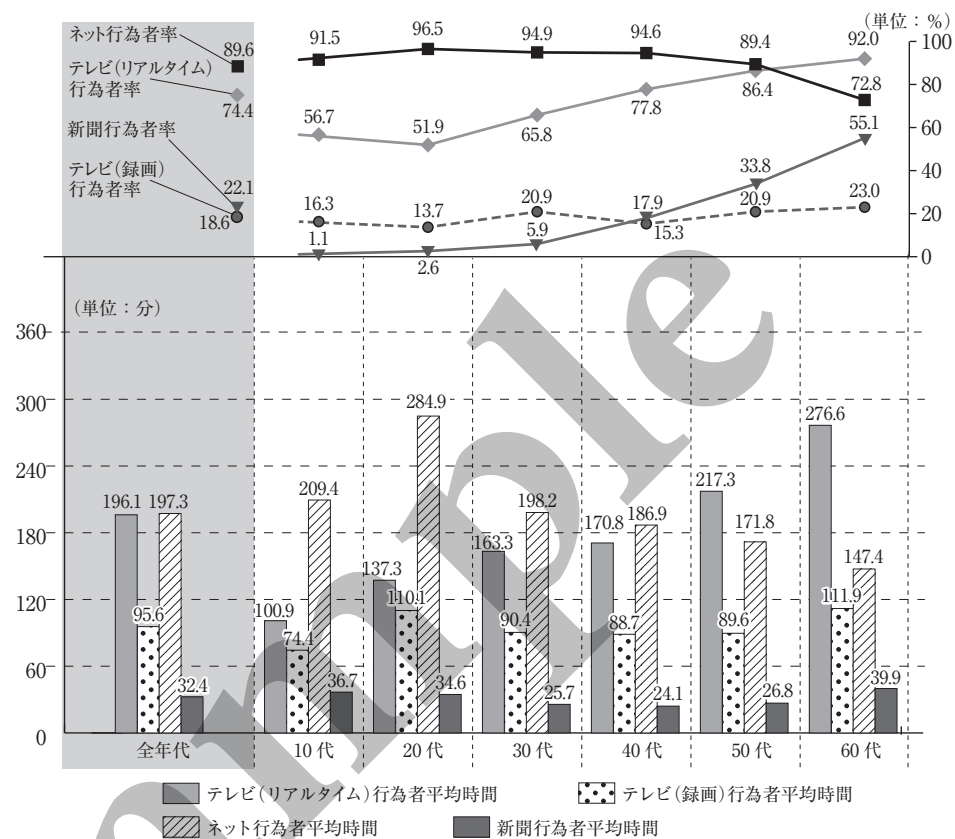
くんかとは、贈呈しようか、というほどの意味である。途方にくれ、落胆していた少年たちの顔に突然、生気がよみがえった。それは囚われの縄を解かれたような、妄執がおちたような、その他もろもの（注6）きはん 羈絆を脱したような、すがすがしく濁りのない顔に返った。

「うん、くんべ。」と少年の一人が言った、「なせ、これ先生にくんべや。」「くんべ、くんべ。」「先生、

（裏面に続く）

次に掲げる図表は、総務省情報通信政策研究所が行った「令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」のうちの、「平日 主なメディアの行為者率・行為者平均時間（全年代・年代別）」（【図】）、「情報源としての重要度（全年代・年代別）」（【表Ⅰ】）、「各メディアの信頼度（全年代・年代別）」（【表Ⅱ】）の集計結果である。【メモ】はこれらの図表資料を踏まえて、Sさんが整理したものである。【メモ】の空欄に入る文章を、一〇〇字以内でまとめなさい。

【図】 平日 主なメディアの行為者率・行為者平均時間(全年代・年代別)



(総務省情報通信政策研究所「令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」から作成)

〈データから読み取れたこと〉

- 「ネット行為者率」と「テレビ(リアルタイム)行為者率」では、50代までは前者が後者を上回っているが、60代では逆転し後者が上回っている(【図】)。
- 全年代での「テレビ(リアルタイム)行為者平均時間」と「ネット行為者平均時間」はほぼ同等だが、「テレビ(録画)行為者平均時間」を加算すると、10代、20代を除きテレビの行為者平均時間の方が上回る(【図】)。
- 重要度の高さは、全年代では「テレビ」「インターネット」「新聞」「雑誌」の順で、令和2年度と3年度で順位に変化はない(【表Ⅰ】)。
- 10代から30代までは「インターネット」の重要度が最も高く、40代以降は「テレビ」の重要度が最も高くなっている(【表Ⅰ】)。
- 「テレビ」「新聞」「雑誌」の重要度は、全年代では令和2年度に比べて3年度では若干低下しているが、「インターネット」の重要度はほぼ横ばい(【表Ⅰ】)。
- 信頼度の高さは、全年代では「新聞」「テレビ」「インターネット」「雑誌」の順で、令和2年度と3年度で順位に変化はない(【表Ⅱ】)。
- 令和2年度に比べて3年度では「テレビ」「新聞」「インターネット」の信頼度が低下している(【表Ⅱ】)。



〈覚え書き〉

- ・項目4や5から推測すると、若い年代の人が年齢を重ねていくことで、項目1や2、3の状況は今後変化していくものと考えられる。
- ・IT時代だと言われるだけに、項目6と7に見る状況には問題がある。



〈「インターネットの今後」に関して〉

【表Ⅰ】 情報源としての重要度(全年代・年代別)

【令和3年度】 (単位%)								(参考)【令和2年度】 (単位%)							
	全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代		全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
テレビ	83.9	84.4	69.3	82.2	82.4	89.2	92.4	テレビ	86.7	84.5	77.0	82.4	89.9	90.6	91.1
新聞	48.7	28.4	28.4	25.9	48.8	62.3	80.8	新聞	52.8	28.2	31.5	38.8	53.7	69.7	75.5
インターネット	77.7	84.4	86.0	89.1	81.2	74.7	56.5	インターネット	77.3	89.4	85.9	82.8	82.8	72.1	58.5
雑誌	15.7	16.3	9.8	10.9	16.4	18.5	20.3	雑誌	17.9	17.6	13.6	16.4	18.7	19.5	20.2

※上記の表の割合はいずれも「非常に重要」と「ある程度重要」と回答した割合の合計。

【表Ⅱ】 各メディアの信頼度(全年代・年代別)

【令和3年度】 (単位%)								(参考)【令和2年度】 (単位%)							
	全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代		全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
テレビ	60.3	70.2	46.0	55.9	55.2	66.3	69.9	テレビ	61.6	65.5	54.9	56.8	62.3	62.4	67.4
新聞	62.8	66.0	49.3	51.4	60.8	69.4	77.2	新聞	66.0	62.7	54.9	60.4	70.9	67.2	74.1
インターネット	28.2	31.2	25.6	25.5	30.9	31.6	24.3	インターネット	29.9	31.0	36.2	28.4	29.1	24.0	32.6
雑誌	16.5	19.1	20.0	16.2	17.9	13.8	13.8	雑誌	16.6	21.1	20.2	20.0	18.1	10.8	12.8

※上記の表の割合はいずれも「非常に信頼できる」と「ある程度信頼できる」と回答した割合の合計。

(総務省情報通信政策研究所「令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」から作成)

ある日、私（先生）と呼ばれている）は、釣りをしていた「長」や「かんぶり」というあだ名の少年たちに出会い、鮎を売ってもらう。次の文章は、それから三日して、少年たちが、私の家を訪ねてきた場面である。

「鮎とつてきただよ。」と長が言った、「買ってこれせえな、先生。」

私はかれらの期待に満ちた注目をあびて、自分に拒絶する勇気のないことを悟り、かれらを勝手口へ廻らせた。そこでもかれらは一列に並び、ひとりひとりが私に向かって自分の鮎に値を付けさせた。そのときになって初めて、寝起きのほんやりした私の頭が、かれらの奸悪な計略を理解した。つまり、まとめて売れば安くなるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない、という狙いなのだ。

「ほれ、みせえま。」とかれらはそれぞれの鮎を私に誇示した、「こんなにえつけえだ、五寸くれえあるだえ、先生。」

そして「しよつから」へゆけばこれ一尾で一かんは取られる、と言って互いに値を、肯定しあうのであった。私はそこでもまた自分が罠に落ち、縛りあげられたことを知った。私はかれらの誘導にしたがって、値段を付け、それらを買取った。

「いいさ。」と私はかれらの去ったあとで自分に言い聞かせた、「味噌煮にしておけば保つからな、当分おかずには困らないで済むわけだ。」

私はまえの味噌煮を井へ移して、それらの鮎を新しく味噌煮にしかけた。

人は信用しないかもしれない、私自身もこれを書きながら、たぶん人は事実だとは信じないのだろうと思うのであるが、少年たちはその儲け仕事があまりにたやすく、かつ確実であることに昂奮と情熱を感じたらしい。二三日するとまたやって来て、さもうれしそうにはしゃぎながら、窓の戸を叩いた。

「並べつてばな。」と長の言うのが聞こえた、「おんだらが先だぞ、押すな。」

拒絶されようなどとは寸毫も疑わず、確信そのもののような少年たちの顔を見て、それだけで私は自分の敗北を認めた。

——ここまで読まれた方は、もはや小悪魔どもが私を放さないだろう、と想像されるにちがいない。私にしても、仮にふところもつとあたったかであったら、容易にかれらの手から逃れがたかったらうと思う。人は黄白の前には、しばしば恥を忍んで屈しなければならぬものだ。少年たちが四度目に襲撃をかけて来たとき、ふところの窮乏という現実に助けられて、私はきつぱりと鮎の買い取りを拒絶した。

するとそこに、まったく予想しない事が起こって、私をおどろかせた。私に拒絶されて、少年たちは明らかに失望し、途方にくれた。かれらは顔を見交わし、先生が駆け引

しているのではないかと疑い、そうでないことを認めるともつと失望し、どうしたものかというふう

に、それぞれの手にした器物の中の鮎を見まもった。

「みんな。」と長が急に言った、「それじゃあこれ先生にくんか。」

くんかとは、贈呈しようか、というほどの意味である。途方にくれ、落胆していた少年たちの顔に突然、生気がよみがえった。それは囚われの縄を解かれたような、妄執がおちたような、その他もろ

もろの羈絆を脱したような、すがすがしく濁りのない顔に返った。

「うん、くんべ。」と少年の一人が言った、「なせ、これ先生にくんべや。」「くんべ、くんべ。」「先生、これ先生にくんよ。」とかんぶり、が言った、「みんな、勝手へいつてあけんべや。」

私は自分の大きな過誤を恥じた。

少年たちに狡猾と貪欲な気持ちを起こさせたのは私の責任である。初めに私は「その鮎をくれ。」と言えよよかったのだ。売ってくれと言ったために、かれらは狡猾と貪欲にとりつかれた。私のさみしいふところを搾取しながら、かれらも幸福ではなかった。その期間、かれらは貪婪な漁夫でありわる賢い商人だったからだ。私は深く自分を恥じた。

「先生にくんよ、か。」と私は口まねをしてみた、「これ先生にくんよ。」

そう言ったときの、すがすがしく、よみがえったような顔つきや動作を思いうかべながら、私は深く自分を恥じた。

場面の展開

場面1 少年たちの罠に落ちたと感じる私（13行目）

「釣りをする少年たちから鮎を売ってもらった私」

▽少年たちが鮎を売りに家へと来る

▽私は期待に満ちた注目をあび、拒絶する勇気のないことを悟る

▽少年たちは、ひとりひとりの鮎に値を付けさせる

▽奸悪な計略＝一尾ずつなら安い値踏みはできないという狙いを理解し

▽自分が罠に落ちたと知り

▽私は、味噌煮にすればいいと自分に言い聞かせる

場面2 少年たちの変化と、過誤を自覚する私（14～33行目）

▽少年たちは、儲け仕事があまりにたやすく確実であることに昂奮と情熱を感じる

▽私は、確信しきっているような少年たちを見て自分の敗北を認める

←（だが）

▽四度目に来たとき、私は金銭がなく小悪魔どもの要求を拒絶する

←すると「予想しない事」が起こる
▽少年たちは拒絶されて失望し、途方にくれ落胆したが

←「先生にくんか」と言って

▽生気がよみがえり、すがすがしい濁りのない顔に返る

←私は自分の大きな過誤を恥じる

場面3 過誤の内実（34行目）

▽少年たちに狡猾と貪欲な気持ちを起こさせたのは私の責任

←「鮎をくれ」と言えよよかったのに、売ってくれと言ったために狡猾と貪欲に取りつかれた

←少年たちを幸福ではない存在にした自分を、私は深く恥じた

▽少年たちのすがすがしく、よみがえったような顔つきや動作を思い、私は深く自分を恥じた

<過誤の内実>

<少年たちの変化と、過誤を自覚する私>

<少年たちの罠に落ちたと感じる私>

場面の展開の項に記したように、鮎を売りつけに家にまで来るようになった少年たちに対する「私」の思いが変化していった様子を記した話である。場面展開の中で、出来事とからめて、「私」の心情とその変化を読み取ることがポイントである。また、14行目や19行目の記述に明らかのように、かつての体験を「私」が事後的に語っているという語りの視点がとられ、思い出を回想的に描写しているという体裁のもとに物語が展開していることにも着目したい。出来事の移り行き、展開から〈ストーリー・あらすじ〉を押さえつつ、人物の心情に着目して〈テーマⅡ主題Ⅱその話が訴えていることの中心〉に肉薄しよう。各場面を踏まえて、物語の展開を〈大意〉としてまとめれば、次のようになるであろう。

釣りをする少年たちから鮎を売ってもらった（「前書き」）私の家へ、彼らが鮎を売りに来た。私は期待に満ちた注目をあび、拒絶できなかった。少年たちはひとりひとりの鮎に値を付けさせたが、それは一尾ずつなら安い値踏みはできないだろうという奸悪な計略だと理解された。私は異に落ちたと知りながら、味噌煮にすればいいと自分に言い聞かせた（場面1）。私は、少年たちの昂奮と情熱に、自分の敗北を認めるしかなかった。だが、四度目に来たとき、私はお金がなく小悪魔どもの要求を拒絶した。すると、予想しない事が起こった。少年たちは拒絶されて失望し落胆したが、「先生にくんか」という言葉をきっかけに、生気をよみがえらせ、すがすがしい濁りのない顔に返ったのだった。私は自分の大きな過誤を恥じた（場面2）。少年たちに狡猾と貪欲な気持ちを起こさせたのは私の責任だった。初めから「鮎をくれ」と言えばよかったのに、売ってくれと言

ったために少年たちは狡猾と貪欲に取りつかれた。すがすがしく、よみがえったような彼らの顔つきや動作を思い、彼らを幸福ではない存在にしたのは自分だと、私は深く自分の過誤を恥じた（場面3）。

だが、この展開を一〇〇字にまとめなければならない。細部は割愛して、巨視的な観点から核心となる要素を抽出しよう。この物語は、少年たちの要求を「私」が拒絶したことで、少年たちの様子も、また「私」の心情も転換したことを描いている。そのことを把握したい。対比的な変化を抽出して整理すれば、

- ① 奸悪な計略、狙いをもって鮎を売りに来る少年たち（「小悪魔ども」）……2点
 - ② それを理解していながら拒絶できずに買わされていた「私」……2点
 - ③ お金がなく拒絶する（「これが転換点」）……1点
 - ④ 鮎をくれると言って、生気をよみがえらせ、すがすがしい顔に返る少年たち……2点
 - ⑤ 少年たちを狡猾で貪欲にしていたのは鮎を買った自分だと、過誤を深く恥じる「私」……3点
- ということになる。これらの要素を、全体の整合性に配慮し、工夫しながらまとめた。*は必須要素
- まとめるにあたっては、〈小憎らしい少年たちだと思っていたら、彼らをそのようにさせていたのは実は自分だった〉という趣旨が中心となるテーマなので、⑤へと転換していく要素が全く出ていないものは、全体が0点となる。

私は少年たちの奸悪な計略を知りつつも鮎を買わされた	② 1点分
いたが、金のないときに拒絶すると、彼らはすがすがしい顔に返り鮎をくれたのだった。私は、鮎を買う自分が	③ 1点分
彼らを狡猾で貪欲にしていたのだと深く自分を恥じた。	④ 1点分

山本周五郎（やまもと いちろう）

一九〇三年—一九六七年。小説家。

主な作品

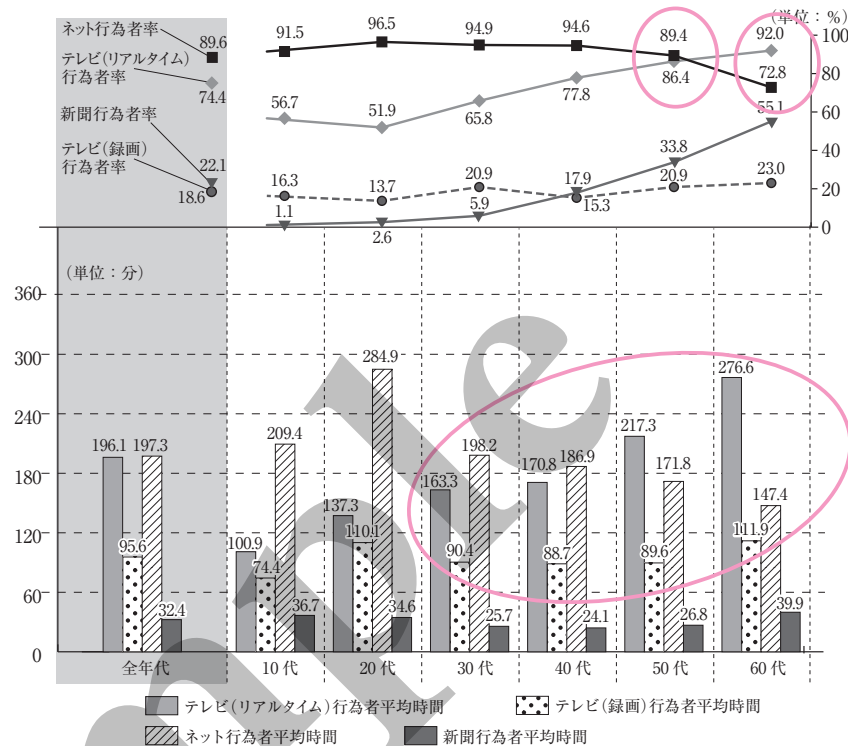
「日本婦道記」「樞ノ木は残った」「赤

出典

「青べか物語」の一節。

次に掲げる図表は、総務省情報通信政策研究所が行った「令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」のうちの、「平日 主なメディアの行為者率・行為者平均時間（全年代・年代別）」（図）、「情報源としての重要度（全年代・年代別）」（表Ⅰ）、「各メディアの信頼度（全年代・年代別）」（表Ⅱ）の集計結果である。【メモ】はこれらの図表資料を踏まえて、Sさんが整理したものである。【メモ】の空欄に入る文章を、一〇〇字以内でまとめなさい。

【図】 平日 主なメディアの行為者率・行為者平均時間（全年代・年代別）



【表Ⅰ】 情報源としての重要度（全年代・年代別）

【令和3年度】

(単位%)

	全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
テレビ	83.9	84.4	69.3	82.2	82.4	89.2	92.4
新聞	48.7	28.4	28.4	25.9	48.8	62.3	80.8
インターネット	77.7	84.4	86.0	89.1	81.2	74.7	56.5
雑誌	15.7	16.3	9.8	10.9	16.4	18.5	20.3

(参考) 【令和2年度】

(単位%)

	全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
テレビ	86.7	84.5	77.0	82.4	89.9	90.6	91.1
新聞	52.8	28.2	31.5	38.8	53.7	69.7	75.5
インターネット	77.3	89.4	85.9	82.8	82.8	72.1	58.5
雑誌	17.9	17.6	13.6	16.4	18.7	19.5	20.2

※上記の表の割合はいずれも「非常に重要」と「ある程度重要」と回答した割合の合計。

【表Ⅱ】 各メディアの信頼度（全年代・年代別）

【令和3年度】								(参考)【令和2年度】							
	全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代		全年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
テレビ	60.3	70.2	46.0	55.9	55.2	66.3	69.9	テレビ	61.6	65.5	54.9	56.8	62.3	62.4	67.4
新聞	62.8	66.0	49.3	51.4	60.8	69.4	77.2	新聞	66.0	62.7	54.9	60.4	70.9	67.2	74.1
インターネット	28.2	31.2	25.6	25.5	30.9	31.6	24.3	インターネット	29.9	31.0	36.2	28.4	29.1	24.0	32.6
雑誌	16.5	19.1	20.0	16.2	17.9	13.8	13.8	雑誌	16.6	21.1	20.2	20.0	18.1	10.8	12.8

※上記の表の割合はいずれも「非常に信頼できる」と「ある程度信頼できる」と回答した割合の合計。

(総務省情報通信政策研究所「令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」から作成)

着眼点

- 資料を確認して、
- (1) 顕著な傾向として表れている事柄に注目する
 - (2) 細部に表れている事柄にも着目していく
- という手順で読み取っていく。

(1) の観点からそれぞれの図表を読み取ると、

【図】 50代までは「ネット行為者率」の方が「テレビ(リアルタイム)行為者率」を上回っているが、60代では後者が前者を上回っている

【表Ⅰ】 情報源としての重要度は、全年代では数値の高い順に「テレビ」「インターネット」「新聞」「雑誌」となっており、令和2年度と3年度で順位に変化はない

10代から30代までは「インターネット」の重要度が最も高い数値で、40代を境に「テレビ」の重要度の方が高くなっており、令和2年度と3年度で変化はない

【表Ⅱ】 各メディアの信頼度は、全年代では数値の高い順に「新聞」「テレビ」「インターネット」「雑誌」となっており、令和2年度と3年度で順位に変化はない

令和2年度に比べ3年度では、20代・40代で「新聞」への信頼度が低下している

一方、(2)の観点からは、

【図】 「新聞行為者率」が年齢を重ねるとともに上昇していくが、60代でも「テレビ(リアルタイム)行為者率」や「ネット行為者率」を超えるものではない

・全年代での「テレビ(リアルタイム)行為者平均時間」と「ネット行為者平均時間」はほぼ同等だが、「テレビ(録画)行為者平均時間」を計算すると、10代、20代を除き「テレビ行為者」の平均時間の方が上回る

【表Ⅰ】 「テレビ」「新聞」「雑誌」の重要度は、全年代では令和2年度に比べて3年度では若干低下しているが、「インターネット」はほぼ横ばいである

【×毛】

Sさんの【メモ】は、図表を踏まえて作成されたものである。Sさんの関心がどこにあるのかを図表のデータおよび【メモ】の内容に即して把握し、「インターネットの今後」に関して「どうとらえているのかを推論を交えつつ判断し、解答を組み立てていくことになる。考え方としては、どんな図表が提示されているかはざっと確認するにとどめ、設問が設定されている【メモ】の中心に着目していき、項目1〜7が図表のどの部分から抽出されたものかを照合した後に、空欄へと続く【メモ】の内容の展開を押さえていく、というのが解答への近道となる。図表などの資料問題では、直接解答とは関わらない情報が多く含まれる場合もあるので、どこに設問のポイントがあるのかをいち早く見抜く力が重要となる。

Sさんが図表から読み取ったことは項目1〜7に掲げられているので図表とざっと照合しよう。そして、「覚え書き」に着目すると、「項目4や5から推測すると、若い年代の人が年齢を重ねていくことで項目1や2、3の状況は今後変化していくものと考えられる」「I

「T時代」と言われるだけに、項目6と7に見る状況には問題がある」という二点を導き出していることがわかる。ここから推論すれば、「インターネットの今後」に関して「何か言うべきことがある」とし、解答例の方向のものになるであろう。

① 近い将来……「インターネット」が優位に立つ ……2点

② 主なメディアの中で（優勢になる） ……2点

③ 「行為者率」「重要度」とともに（優勢になる） ……2点

④ 「新聞」「テレビ」より「信頼度」が低い ……2点

*⑤ よりの確な情報を発信する情報源として改善していく ……2点

空欄に入れるのは「インターネットの今後」に関して」ということに関わるものでなければならないので、①および⑤の要素にまったく触れていないものは全体が0点となる。（*は必須要素）

□については文字数に比較的余裕があるので、引用符として付してある。余裕がなければ取ってもよい。

- 1 「ネット行為者率」と「テレビ(リアルタイム)行為者率」では、50代までは前者が後者を上回っているが、60代では逆転し後者が上回っている(【図】)。
- 2 全年代での「テレビ(リアルタイム)行為者平均時間」と「ネット行為者平均時間」はほぼ同等だが、「テレビ(録画)行為者平均時間」を加算すると、10代、20代を除きテレビの行為者平均時間の方が上回る(【図】)。
- 3 重要度の高さは、全年代では「テレビ」「インターネット」「新聞」「雑誌」の順で、令和2年度と3年度で順位に変化はない(【表Ⅰ】)。
- 4 10代から30代までは「インターネット」の重要度が最も高く、40代以降は「テレビ」の重要度が最も高くなっている(【表Ⅰ】)。
- 5 「テレビ」「新聞」「雑誌」の重要度は、全年代では令和2年度に比べて3年度では若干低下しているが、「インターネット」の重要度はほぼ横ばい(【表Ⅰ】)。
- 6 信頼度の高さは、全年代では「新聞」「テレビ」「インターネット」「雑誌」の順で、令和2年度と3年度で順位に変化はない(【表Ⅱ】)。
- 7 令和2年度に比べて3年度では「テレビ」「新聞」「インターネット」の信頼度が低下している(【表Ⅱ】)。

- ・項目4や5から推測すると、若い年代の人が年齢を重ねていくことで、項目1や2、3の状況は今後変化していくものと考えられる。
- ・IT時代だと言われるだけに、項目6と7に見る状況には問題がある。

〈「インターネットの今後」に関して〉

・令和2年度から3年度へと「テレビ」「新聞」「インターネット」への信頼度が低下しているが、「テレビ」では20代、40代での、「新聞」では20代・40代での、「インターネット」では20代、30代、60代での低迷が影響している。「雑誌」は横ばいであるということが見て取れる。

というものが見て取れる。

とはいうものの、Sさんの【メモ】が付されているので、設問を解くに当たっては、Sさんの【メモ】の内容に沿って考えていけばよい。

【メモ】に関しては、まず「データから読み取れたこと」として、図表から読み取ったことが項目1～7として掲げられ、そのあとに〈覚え書き〉として二点記され、そして、それらを受けて「インターネットの今後」に関して」と、空欄に帰結していくという展開になっていることを確認しよう。

したがって、これらの展開を踏まえて意味が通るよう整合性に配慮して空欄を文章で埋めていくことになる。